報告番号	※　　第　　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目	大正・昭和戦前期の日本における航空思想の普及
氏　　名	大山　僚介

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は①大正・昭和戦前期における帝国飛行協会（後に大日本飛行協会）・国民飛行会の活動・言説の分析を通して、航空思想がどのように普及されていたのか、②地域社会においてそれがどのように受け止められ展開したのか、を明らかにしたものである。「航空機への憧れや文化的イメージは、航空機を持つ軍隊の受容・支持や軍隊観の変化に関わるのではないか」という問題関心を出発点として、その背景にある当時の航空イメージや普及の必要性が喧伝されていた航空思想の研究を行った。具体的には帝国飛行協会・国民飛行会という戦前の民間航空団体の活動・言説の分析を中心とし、①これまで国防思想とされていた航空思想の再定義、②1910～30 年代の航空思想の内容の通時的変遷の解明、③先行研究では未検討であった地域社会の航空をめぐる動向を飛行場建設過程の分析から明らかにすることを課題とした。

第一章では、満洲事変期の石川県における軍用飛行機献納運動の分析を通して、戦争熱の様相とそこから窺える民衆と飛行機の関係を考察した。そして、「飛行機への憧れ等の意識が、飛行機を持つ軍隊の受容・支持へと繋がる側面があったのではないか」という問題関心を提示した。

第二章では、帝国飛行協会・国民飛行会の活動・言説の分析を通じて、1910～1920 年代における航空思想の内容とその普及のされ方を明らかにした。第一次世界大戦の終結が航空イメージの変化の画期となっており、一次大戦終結後は航空機の軍事利用のみでなく、文化・平和的側面も注目されるようになった。1925～27 年に帝国飛行協会が主催した航空ディスプレーでは、航空機の国防的側面と文化・平和的側面を同時に主張する言説が継承された。軍縮世論が強まる中で、航空思想は新しい形で軍隊への支持を取り付ける世論対策として機能したと思われる。そして本章での分析から、航空思想を「文明・科学の利器である航空機を発達させることによって、国防を完全にすると共に、日本の文化・文明をも発展向上させようとする思想」と定義した。

第三章では、1933 年に帝国飛行協会が発行した『航空日本の建設』で表明された事

業方針、特に飛行場建設の推進という方針がどのように登場したのかを、1920年代中盤からの航空思想の変遷を跡づけながら明らかにした。航空思想の基本的枠組みに変化はないものの、満洲事変後は国防・防空にアクセントが置かれるようになり、機関誌上の飛行場についての論説においても、満洲事変後は都市の発展のみでなく、都市防空の機能も飛行場に期待するようになった。

第四章では、1930年代の帝国飛行協会の航空思想を、総務理事を務めた四王天延孝の活動と当該期の帝国飛行協会の冊子の主要部分を執筆した井上四郎の言説に焦点をあてて分析した。四王天の積極的な航空思想普及事業により、太平洋無着陸横断飛行計画に失敗して危機に陥っていた帝国飛行協会は持ち直した。また井上の言説は、1933年発行の『航空日本の建設』の枠組みを引き継ぎつつも、航空の問題を東西の文明史・文化史の流れに位置付ける等の発展をみせた。

第五章では、1930年代初頭の富山飛行場の建設過程を事例として、地方においてどのように航空が捉えられたのか、そして航空思想が飛行場建設過程でどのように働いたのかを考察した。帝国飛行協会の航空思想は飛行場建設の世論対策として普及されていた。県当局や商工会議所の飛行場建設の論理を分析すると、より具体的な富山県特有の状況と飛行場建設の意義が結びつけられていた。またそうした飛行場建設の論理が、実際の飛行場建設運動を軍事的方向から民間飛行場の建設へとシフトさせる機能を果たしたことを指摘した。

第六章では、挙母町（現豊田市）に建設された衣ヶ原飛行場を事例として、航空イメージの変遷を明らかにした。当初は国防的観点以上に、文化・産業・社会への貢献という側面から飛行場建設が捉えられ、「飛行町」建設計画もあった。名古屋の飛行場として公共用飛行場を目指し、国際飛行場としての開港を目指す動きもあった。しかしそうした運動は挫折し、1935年の日本防空義勇飛行隊創設を境に、衣ヶ原飛行場は「防空飛行場」と位置付けられる等、目指す飛行場の方向性に大きな転換があった。また戦後の航空イベントをみると、文化・平和的な航空イメージへの転換がみられた。

終章では、本論文で明らかにした航空思想の内容を整理し、①第一次世界大戦の終結、②1920年代半ばの航空ディスプレー開催、③満洲事変・上海事変の勃発がそれぞれ航空思想変容の画期となったとした。また航空思想を踏まえた上で、地方での民間飛行場建設を分析したことで、先行研究では明らかにされてこなかった飛行場建設を分析する上での新たな視点を提示したことを述べた。最後にいくつかの今後の課題を提示した。